



巻頭言

理工系出版社の役割とは何か

●
曾根良介 Ryosuke SONE

株式会社化学同人 取締役社長



小社と本会とのつながりは意外に深く、それは60数年前に遡る。当時、学術誌とはひと味違った同人誌的な雑誌『化学』を創刊しようと集った気鋭の化学者たちは、いずれも本会の会員だった。その『化学』が今年の1月号で800号を迎えた。60余年という長きにわたりここまで継続できたのは、ひとえに本会との良きつながりがあったからだに感謝している（著者陣の多くは本会員の方がた）。それ以後もCSJカレントレビューをはじめ、本会の協力の下に幾つかの化学書を上梓させていただいている。化学という専門分野にこだわらずに、少し間口を広げ自然科学全般を対象にした本も手掛けるようになった。創立当初から「表現はやさしく、内容は高く」を編集理念として掲げ、京都の地で根をはり、今日に至るまで地道に出版活動を続けている。

とはいえ、昨今の出版界を取り巻く情勢はあまりにも厳しく、版元はここ10年で600社ほど減り、また書店は5000軒ほど消えているのが現状だ。比較的堅いといわれた理工系出版社も例外ではない。何がこのような状況を生み出したのか。ここではそれについて触れず、むしろこうした状況でも生き残っている理工系出版社の役割とは何かについて少し考えてみたい。

ほかでもなく、理工系出版社とは自然科学書を創出している版元だ。では自然科学書の役割とは何であろうか。次の3点が挙げられよう。1つ目は、日々進歩する学問（科学）の現状を的確に捉え、専門家やその分野を目指す研究者の卵に向けて広く伝えること。総説集や専門書などがこれに該当する。2つ目は、積み重ねられてきた科学知識を体系化して、広く共有すべく科学を志す学生に正しく伝え広めること。主に教科書がその任を果たす。3つ目は、一般の人びとに科学・技術の面白さや価値を伝えて科学の裾野を広げ、科学と社会の橋渡しをすること。それを担っているのが、一般向けの科学啓発書や科学読み物だ。

このように見ると、自然科学書は科学の正しい理解や普及に欠かせない存在として、科学の進歩を根底で支えるものといえよう。そして、理工系出版社の役割とは、質の高さを最大限に求め、優れた自然科学書を世に送り出すことにほかならない。その役割を果たすには、優れたエディターシップをもった編集者が、読み手の目線に立って著者と密に協力し合いながら1つ1つ内容を練り上げていくしかない。著者と編集者との健全な連携こそが、自然科学書に輝きを与え、結果的に多くの読者を魅了する。

いつの時代も高い志と熱き情熱をもった人びとが世を動かす。60数年前の『化学』がそうであったように、本会員の中から新たな時代をつくる有志が颯爽と現れ、ともに創造的な自然科学書づくりに挑む、そんな本づくりの現場に立ち合うことができれば、出版人としてこれ以上の喜びはない。そんな中から、欧米の教科書や専門書を超越する書下ろしの素晴らしい自然科学書が現れてくることを期待したい。

© 2018 The Chemical Society of Japan